

要約

本博士論文では、ジョージ・バーナード・ショウ (George Bernard Shaw) の戯曲におけるアイルランドのありようを考察する。まず『人と超人 (*Man and Superman*)』(1903 年) の第三幕の地獄を舞台とする夢の場面において、二項対立的に分類された地獄、地上、天国の関係、つぎに婚姻制度、最後に時空の反復という三つ論点でアイルランドとイギリスの関係を植民地主義的視点から読み解く。これらを理論的な軸として、ショウの三つの戯曲、『ジョン・ブルのもう一つの島 (*John Bull's Other Island*)』(1904 年)、『カンディダ (*Candida*)』(1897 年)、『聖ジョウン (*Saint Joan*)』(1923 年) を考察することで、ショウ演劇のアイルランドに対する潜在意識を掘り起こすことを主眼とする。

第一部で取り上げる『人と超人』の地獄では、主人公ドン・ファン (Don Juan) とアナ (Anna)、その父である石像 (the Statue)、悪魔 (the Devil) という死者達の問答により、社会に潜む固定観念の矛盾が暴露される。その中から、第一章では「地獄-地上-天国」の概念を転覆的に再定義する。これら三つの空間は物理的かつ象徴的に「上と下」と「内と外」の優劣の価値観によって緻密に区別されてきた。そのやり口から、宗主国の利害を重視した植民地の位置／意味づけを読み取る。

この価値観を身近な人間関係に結びつけてみせるのが、第二章で論じる「結婚」である。この社会制度の中で男女が形骸化した義務に縛られるさまは、イギリスが理想として偽装する従属国としてのアイルランドとの必然的で自然な関係にも通ずる。さらに宗主国との「婚姻」関係に拘束される従属国の地獄的状况では、個人を束縛するこの制度が独立を求める志にとって二重の困難となることを指摘する。

第三章で注目するのは、「振り子」の動きと、宙づり状態にあるアイルランドの独立運動である。悪魔は人類の歴史を二極間の反復運動であると悲観視するが、この運動こそ第一章で論じた三空間の虚構を明らかにするものである。さらにドン・ファンが使う劇場のメタファーは、ショウの演劇論を垣間見せつつ「世界劇場 (*theatrum mundi*)」のテーマに依拠することで、アイルランドの問題をより広い舞台へと解放させようとする。

第二部の第四章で扱う『ジョン・ブルのもう一つの島』では、「ユーモア (humour)」の作用を多重的に探り、宗主国と従属国の笑劇的關係を暴露する。本作品は、アイルランド人とイングランド人の「気質／おかし味」の錯誤によって生じる「笑い」、そしてその「笑い」に浸るアイルランドの享樂的、つまり地獄的状况を鮮明に描き出している。その結果、一層悪化する地獄と権力の理想の強化を目の前にして、イングランドの身勝手な英雄気取りの支配欲だけでなく、被植民地アイルランドの無気力な嘲笑に対しても警鐘を鳴らすものであると考える。

第五章では、『カンディダ』の主人公、妻カンディダの演出によって構築される夫婦の舞台に光を当てる。モレル (Morell) と彼の夫婦生活に介入する若いマーチバンクス (Marchbanks) の関係が浮き彫りにする父権制の虚構は、同時に、植民地主義の権力のそれとも重ねられる。「文明化した」イギリスは、「未熟な」アイルランドに対して教育の習得を迫り、さらに理想的な帝国主義の世界を強化するための演劇的貢献をも強要する。しかし、芸術家志望のこの若い男が喜劇の客間から旅発つ姿は、ショウその人を示唆しつつ、自ら演出する世界つまり自治の渴望と解釈することができる。

第六章で論じる『聖ジョウン』は、舞台を 15 世紀フランスから 20 世紀イギリスまで大胆に移動しつつ、終末論的歴史認識に疑問を付す。ジョウン (Joan) を巡り、「聴覚-視覚」、「話しことば-書きことば」という古典的な対立が繰りひ

ろげられるが、これらの二項対立は彼女の死と幻想的復活をもって溶解し、その身体へと収斂される。そのさまは、抑圧された植民地が足踏みしながら成熟しきれず、行き場を失った「声」の運命を辛辣に描き出している。

最後にこれまでの考察を踏まえ、『人と超人』の地獄の場面に立ち返る。ここでは夢という舞台でショウの哲学を存分に発揮しつつ「超人思想 (the Superman)」が開陳されるが、他の戯曲同様、ことアイルランドについては口が重い。しかし、喜劇のメインプロットに差し込まれた哲学的サブプロットによる劇中劇からは、その登場人物たちの討論を通して、ショウが生まれ育ったアイルランドと劇作家としての長い人生を終えるまで活躍の場となったイギリスに対する笑いや怒り、不安を読み取ることができる。本博士論文の考察により、表向きの沈黙がアイルランドの植民地問題を国家主義的に解決しようとする事への反発であり、あえてそう銘打たずともショウの戯曲に貫くトposとしてアイルランドの問題を解放する、そのような作家としてバーナード・ショウを見直したいと考える。